

## 活用順調！侯野別邸

侯野別邸は、佐藤秀三の代表的作品であるとともに昭和前期モダニズムにおけるハーフティンバー・スタイルを基調とした和洋折衷住宅である。また、主屋棟・南棟・事務棟をY字型に配置した棟構成にも特徴があり、ダイニングルームを中心としたコンパクトなプランニングに大邸宅建築における平面計画が示されている。建築年は昭和14(1939)年。

平成16(2004)年には国の重要文化財に指定されるも火災により建物の大部分が焼失。国の文化財指定解除後に市の公園施設として再建された。主な部屋の造りや仕上げはオリジナルのものを忠実に再現し、平成29(2017)年に横浜市認定歴史的建造物となった。

主屋が位置する侯野別邸庭園は、戸塚区の南端にあり敷地面積が5.8haという広大な公園。園内は別邸のある内苑と外苑に分けられ、外苑では都会の喧騒を忘れさせる森閑とした雰囲気や四季折々の花木・草花を楽しむことができる。



内苑の緑とヒメヒオウギサイゼン



ハーブコンサートの様子



別邸の外観

## 歴史を生かしたまちづくり相談室 相談受付中!

時代の変化と共に、横浜を代表する歴史的建造物の多くが次々と姿を消してきた。特に、個人が歴史的建造物を所有し続けることは、日常的な修繕や改修等に大きなコストがかかり、相続等を契機に売却、取り壊される事象が後を絶たない。そこで、少しでも所有者の不安に寄り添い、歴史的建造物を後世へ残す一助になれるかという思いから、平成26(2014)年に「歴史を生かしたまちづくり相談室」を開設した。

歴史的建造物の価値を知りたい、改修したい、残したいとの市民等の皆様からご相談を受け即座に専門家、横浜市都市デザイン室の担当者、公益社団法人横浜歴史資産調査会の担当者が集い、対応策を考え、現地に向かうことにした。横浜市内はもとより、周辺他都市からのご相談にも対応している。

これまでに、個人の所有する歴史的建造物の相続や維持管理に関するご相談のほか、企業からも歴史を生かしたまちづくりへの連携等に関するご相談をいただいている。

ご相談いただいたことがきっかけで認定歴史的建造物となり、外観改修工事への助成を行っている事例もある。相談室の存在が、所有者ほか皆様の歴史的建造物の価値や今後の対応に対する理解を深め、歴史的建造物が横浜の宝として将来に渡って残される一助となれば幸いです。

どなたからのご相談でも無料で受け付けている。郵送、Eメール、ファクシミリによるご相談の他、毎週水曜日(午前10時から午後3時まで)には、電話による相談も受け付けている。



ご相談から歴史的建造物の認定に至った近代和風建築

## 「歴史を生かしたまちづくり相談室」受付中! 皆様からのご相談をお待ちしています。

【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテージ)内  
「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室  
TEL / FAX : 045-651-1730 E-mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp

## 公益社団法人横浜歴史資産調査会 令和元年度の取り組み

Y O K O H A M A H E R I T A G E

### 「シルクロード・ネットワーク・南砺フォーラム 2019」の開催

ヨコハマヘリテージが中心となって設立した、絹の歴史と文化を守り育てる地域や関係者が集うシルクロード・ネットワーク協議会のフォーラムは、平成27(2015)年横浜市から始まり、新庄市、福島市、鶴岡市と開催を重ね、5回目となる本年度は富山県南砺市において、6月22日(土)～23日(日)に開催されました。主催はヨコハマヘリテージとNPO法人街・建築・文化再生集団(通称RAC、前橋市)、共催は南砺市。

南砺市は、合掌造りの五箇山が養蚕、砺波平野の城端町が絹織物、彫刻の町井波が蚕種と、まさに絹産業の拠点と言えます。22日の見学会は各町を巡り、絹文化を体感。フォーラムは、田中幹夫南砺市長のご挨拶に始まり、「城端の織物の歴史」、「井波の町並み保存」、「井波の町家再生」をテーマにした講演や、全国各地から絹文化を生かしたまちづくりの発表がありました。これを受けて参加者皆でシンポジウムが行われ、城端の絹文化の継承や井波の町並みを伝統的建造物群保存地区に導く方針が示されました。



五箇山相倉集落(世界文化遺産)

### 「第22回 全国近代化遺産活用連絡協議会鳥取大会」に参加

我が国の近代化に貢献した産業、交通、土木遺産の保存活用を進める全国組織である全国近代化遺産活用連絡協議会にヨコハマヘリテージは今年度から加盟し、7月24日(水)～26日(金)に開催された同協議会の総会、講演会、見学会に参加しました。同協議会は、平成8(1996)年に設立され「活用なくして保存なし」のスローガンのもと、全国の都道府県、関係市町村や団体、企業が加盟し、毎年総会等を開催しています。総会、講演会を順調に終え、見学会は「旧美敷水源地水道施設」(国指定重要文化財)。荒廃していた同地を鳥取市が復元し公開に至っており、山峡の地に洋風のポンプ小屋とろ過池が点在し、見事な歴史的景観を形成しています。山陰本線線路橋梁跡なども見学し、盛況のうちに閉会しました。



旧美敷水源地水道施設(国指定重要文化財)

### 「日本鉄道保存協会総会 2019 長浜大会」の開催

歴史的鉄道車両や施設構造物、関連資料の保存活用を推進する全国組織である「日本鉄道保存協会」にヨコハマヘリテージ

は今年度から加盟し、9月26日(木)～27日(金)、長浜市、敦賀市、南越前町で開催された同協会の総会、講演・シンポジウム、見学会に参加しました。

当日は、全国からJRを始め加盟団体約90名が出席し、藤井勇治長浜市長のご挨拶のもと総会等が始まりました。開催地の長浜市をはじめ3市町の自治体は、旧北陸本線に残る近代化遺産としての鉄道遺産を保存活用するために協議会を設立しました。鉄道遺産をまちづくりや地域活性化に生かしています。横浜は令和4(2022)年の鉄道開業150周年を間近に控えていますので、多めに参考となります。

なお、同協会の代表幹事団体は公益財団法人交通協力会が長年務めてきましたが、事情によりその役目から降りることとなり、ヨコハマヘリテージがその後を引き受けることとなりました。鉄道発祥の地 横浜として活動が注目されます。



小刀根トンネル(敦賀市)

### 「第1回 旧湘南電鉄瀬戸変電所保存活用委員会」の開催

京急電鉄金沢八景駅に隣接する昭和4(1929)年に建造された「旧湘南電鉄(京急電鉄の前身)瀬戸変電所」(鉄骨コンクリート製)の将来にわたる保存活用を目指して、京急電鉄のご協力のもと、横浜市都市デザイン室とヨコハマヘリテージが連携して現況調査を行ってきました。そしてこのたび、具体的な保存活用計画策定に向けた委員会をヨコハマヘリテージの自主事業として設置し、10月2日(水)京急電鉄本社会議室で開催しました。

当日は、これまでの経緯やコンクリート成分調査、耐震、振動調査報告や具体的な保存活用案が話し合われました。同委員会は今年度中にも2回の開催を予定しています。

委員会のメンバーは、委員長に後藤浩氏(工学院大学理事長)、委員に西澤英和氏(関西大学教授)、田村雅紀氏(工学院大学教授)、小野田滋氏(公益財団法人鉄道総合技術研究所情報管理部担当部長)、山本博士氏(公益社団法人神奈川台場地域活性化推進協会代表理事)、梶山祐実氏(横浜市都市整備局都市デザイン室長)、吉田鋼市氏(横浜国立大学名誉教授、公益社団法人横浜歴史資産調査会副会長)です。(順不同)



関西大学西澤研究室らによる耐震振動調査の様相



撮影：米山淳一

## 横浜港口から東京湾頭を照らした外防波堤灯台

関東学院大学教授・公益社団法人 横浜歴史資産調査会社員 中藤誠二

### 横

浜港外防波堤北灯台及び南灯台は、横浜港の第3期拡張工事の中で立案され、昭和10(1935)年に建造されたものである。横浜港の入り口に赤白2つのペアで立つ。港の奥に向かって右側の北灯台が赤色、左側の南灯台が白色をしている。平成31(2019)年3月に光波標識としては必要性が低下したとして廃止、消灯された。なお、さらに港の奥には、第1次横浜築港工事において明治29(1896)年に建設された同本の横浜北水堤灯台があり、今なお現役である。

灯塔は遠くから見ると外壁はコンクリートのように見えるが、近づくると小さなタイルがきめ細かい外面を形成していることがわかる。海洋に建設される灯台のため、波や潮風に含まれる塩分による鉄筋コンクリートの腐食から守る意図もあったと考えられる。塔内のらせん階段はコンクリート製だが、灯室へ上るところは鋳鉄となっている。階段は北灯台は左回り、南灯台は右回りになっている。灯塔の中心には、分銅を垂らすための円柱状の空間(分銅筒)が用意されていた。南北の灯台は基本的に対称をなしているが、内部の部屋の仕切りや配置は異なっている。港湾灯台に居住用の付属建屋があるのも珍

しい。円錐状の灯るう屋根の愛らしさに加えて、直線状の防波堤に立つ円筒状の灯台と直方体の建屋の組み合わせは形としても美しく、横浜港のゲートとして存在感を示している。昭和10年の点灯開始当初より看守員の常駐はなかったが、昭和31(1956)年から昭和49(1974)年にかけて北灯台に信号所が併設されていた際には常駐職員が配置されていたという。

初点灯時の灯器は、通信省燈台局横浜工場の技手であった岡本一郎が外国製のものをベースに改良したアセチレンガス急閃光灯器で、岡本式閃光器と呼ばれる。また同じく岡本一郎が開発した岡本式日光弁が、建設当時のものであるか不明だが、現在も北灯台の屋根にある。日光弁は灯台を自動的に点灯させるセンサーとして機能していた。また、昭和63(1988)年の改修時まで存在していた中間踊り場は2つの灯台が向き合う方向にあった。中間踊り場のある灯台は珍しく、航行する船を監視したり、指示を送ったりするのを目的としたものと考えられる。

灯台竣工前の昭和9(1934)年10月に内務省横浜土木出張所が発行した「横浜港と其修築」には、外防波堤の構築に関する技術的な内容が綴られた最後に「港口に新

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞  
Y O K O H A M A

第35号

令和元[2019]年  
11月30日発行

Since 1989



